

だんだん拓く、だんだん暮らす

Terraced land, terraced living

復興デザインスタジオ最終発表
愛南町・漁村班：岡田・古谷野・徳田・中野・宮原

2025年7月7日

だんだん拓く、だんだん暮らす

Research & Background

01 調査と提案の背景

被害想定と従来の復興手法の問題点



自然との絶え間ない応答の中でできた漁村地域



漁業の変化

自然環境の変化や資源の枯渇などをきっかけに、それぞれの集落が漁業のスタイルを幾度にも渡って変えてきた。



集落空間の形成

地形的制約や気候条件に応じて、山いっばいに広がる食料を生産するための段々畑や季節風から家を守る石垣などの集落空間が築かれてきた。

漁村地域は自然との絶え間ない応答の中で生業や空間の形を変化させてきた。

だんだん拓く、だんだん暮らす

Proposal

02 提案

漁村地域が
これからも続くための

2つの提案

人口減少が進み、かつ漁業という自然と密接に関わる産業を中心とする漁村地域においては従来の復興手法をそのまま適用することは難しくなっている。

そこで、先人たちが積み上げてきた環境の応答という地域のコンテクストをヒントに漁村地域が災害を経ても続いていくための復興手法として、空間のビジョンとそれを実現するための仕組みのセットを提案する。

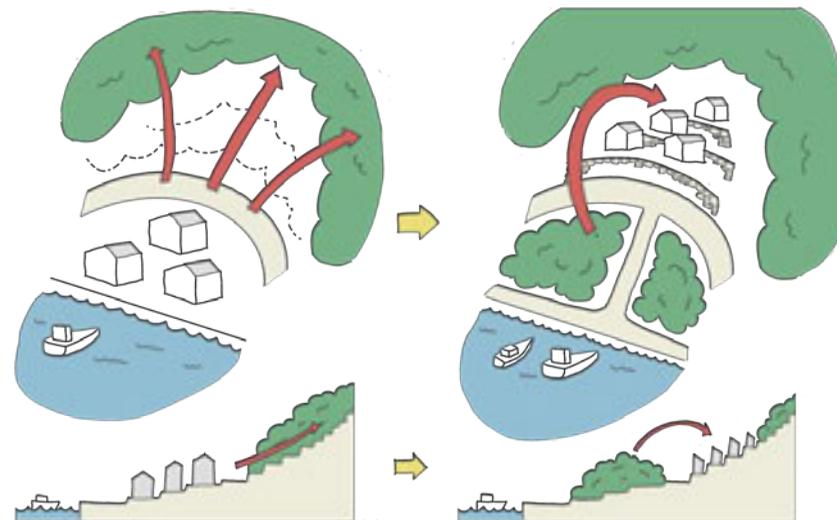
No. 1

空間の将来ビジョン

石垣を利用した 緩やかな高所移転

かつて使われていた段々畑を震災が起こる前から少しずつ再生する。震災後は再生した段々畑の石垣を基礎として仮設住宅を建設し、最終的には集落全体を石垣の上に移転する。

嵩上げや山を切り開く高台移転など大規模な土木を持ち込まず、集落にすでにあるヒューマンスケールの土木資源を活かした、緩やかな高所移転を目指す。



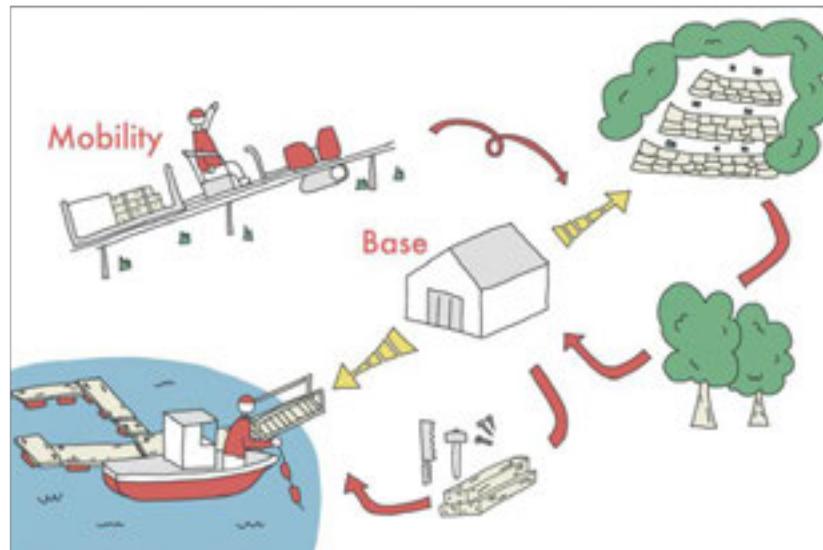
No. 2

実現のための仕組み

資源の域内循環を促す ベースとモビリティ

資材を備蓄しておく倉庫【ベース】と海から山までの斜面をつなぐものらっく【モビリティ】を導入する。

発災前には段々畑の開拓から生じる木材をベースに蓄え、発災後にはそれらを用いてイカダなどの漁業のための場所を再生するために用いるなど、域内の素材を活用した漁業の早期復興を目指す。



だんだん拓く、だんだん暮らす

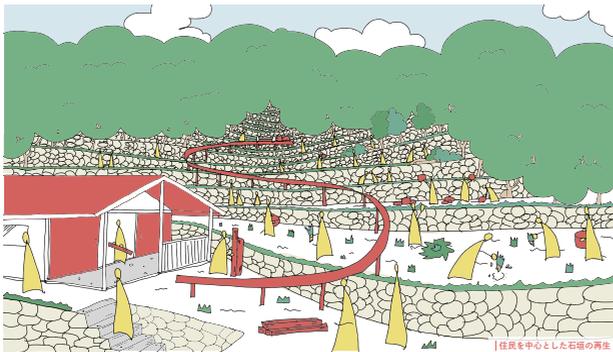
Timeline

03 タイムライン

Phase
01

震災発生前

現在一発災まで



| 住民を中心とした石垣の再生

住民たちが中心となりつつ、地域外からのボランティアも協力して石垣の再生が進み、漁村の風景に変化が生まれ始めている。

山から切り出された木材のほか空き家の解体材などもベースにストックされ、そのうち一部は漁師たちの手によって漁具の製作や修理に活かされる。



| ベースから港へ資材を運搬するノラック

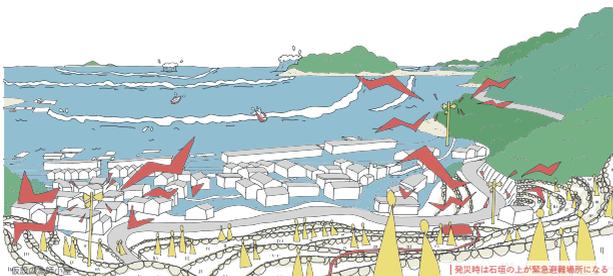


| 切り出した木材などをストックするベース

20

Phase
02発災直後・
応急復旧期

発災一週間（孤立が解消するまで）



| 発災時は石垣の上が緊急避難場所になる

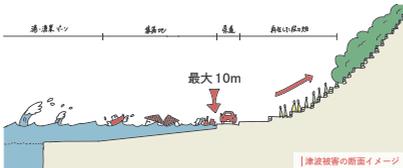
南海トラフ巨大地震が発生すると、漁村地域を含む愛知県全体が最大震度7の激しい揺れに襲われ、地震発生からわずか数分で最初の津波が到達する。

家中では、集落外とつながる唯一の道が寸断され、集落のほとんどの家が浸水被害を受けると予想されている。

そんな時、普段から手入れしてきた石垣の上が、津波から命を守る緊急避難場所として活躍する。石垣の上の倉庫には災害用の食料や医薬品が保管されており、集落が孤立している間も発災直後の数日間を過ごすことが可能になるのだ。



| 一時避難場所へ逃げる



| 津波被害の断面イメージ

22



21

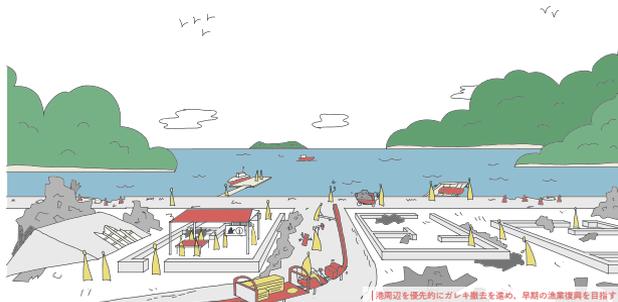


23

Phase 03

漁業再生期

一週間～半年



被災から数ヶ月、人々は漁業の復活に向けて動き始める。

池周辺では地域住民たちの要望を受け、行旅が優先的に瓦葺きの撤去を進めている。一方、ベースにストックしていた資材を用いて、住民たちは自分たちの手で作業小屋やモノブロックの再建に取り組んでいた。

石垣を利用した仮設住宅の設置によって住民の地区内避難が可能となったことにより、こうした漁業の早期復旧・復興が実現するのだ。



24

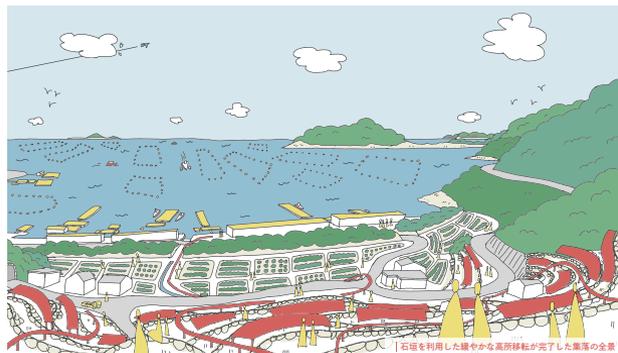


25

Phase 04

復興期・再び日常へ

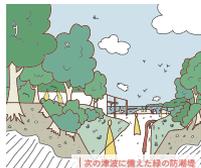
半年～



震災の発生から数年後、住民たちが再生してきた石垣を土台としながら、集落の景色は見違えるよう変化した。

石垣の段やには壁のように壁が並び、斜面地での移動を支えるモノブロックがその間を縫うように束ねられている。かつて集落があった低地部分は、次の津波に備えるために互層の上に土を盛った緑の防潮堤と、住民たちの菜園となっている。主要道路は山側に移動され、地震や津波による寸断のリスクが大幅に小さくなった。

漁村集落はかつての集落の風景や住民たちの営みを引き継ぎながら、これからも暮らし続けられる地域へと生まれ変わったのである。



26



27

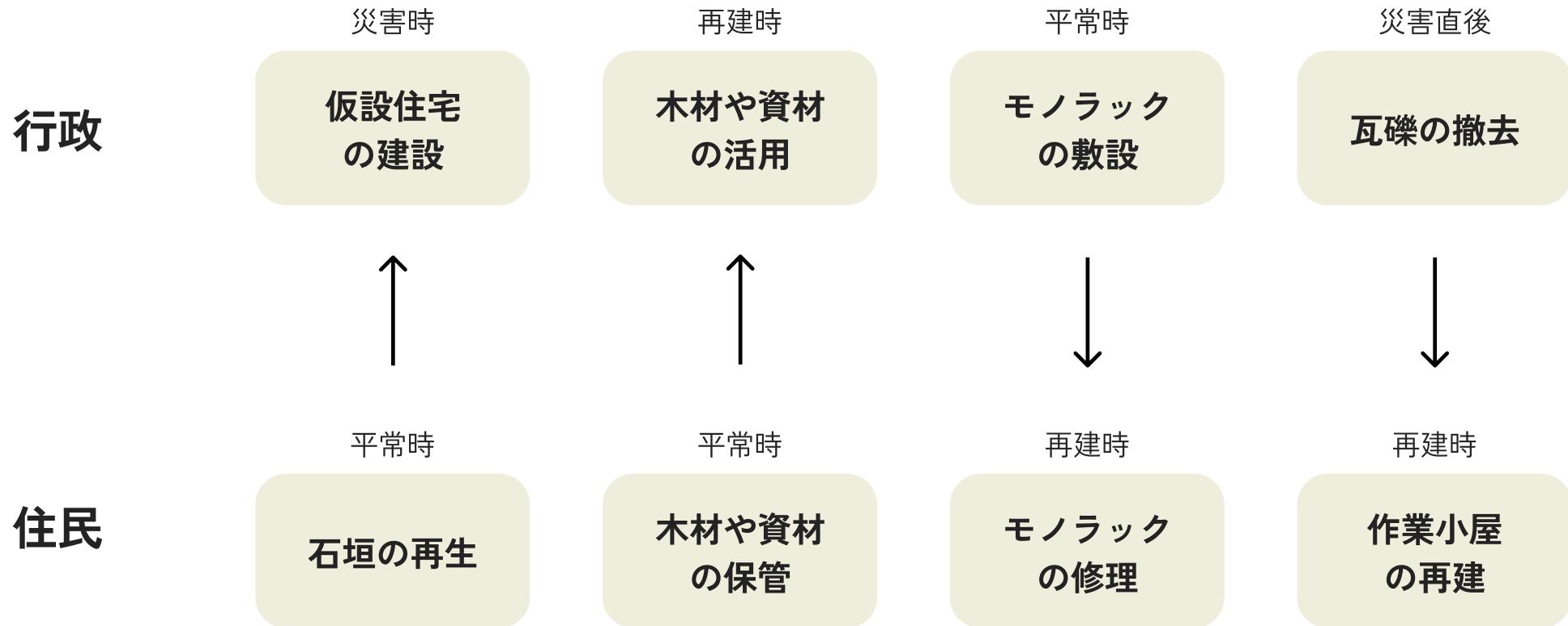
だんだん拓く、だんだん暮らす

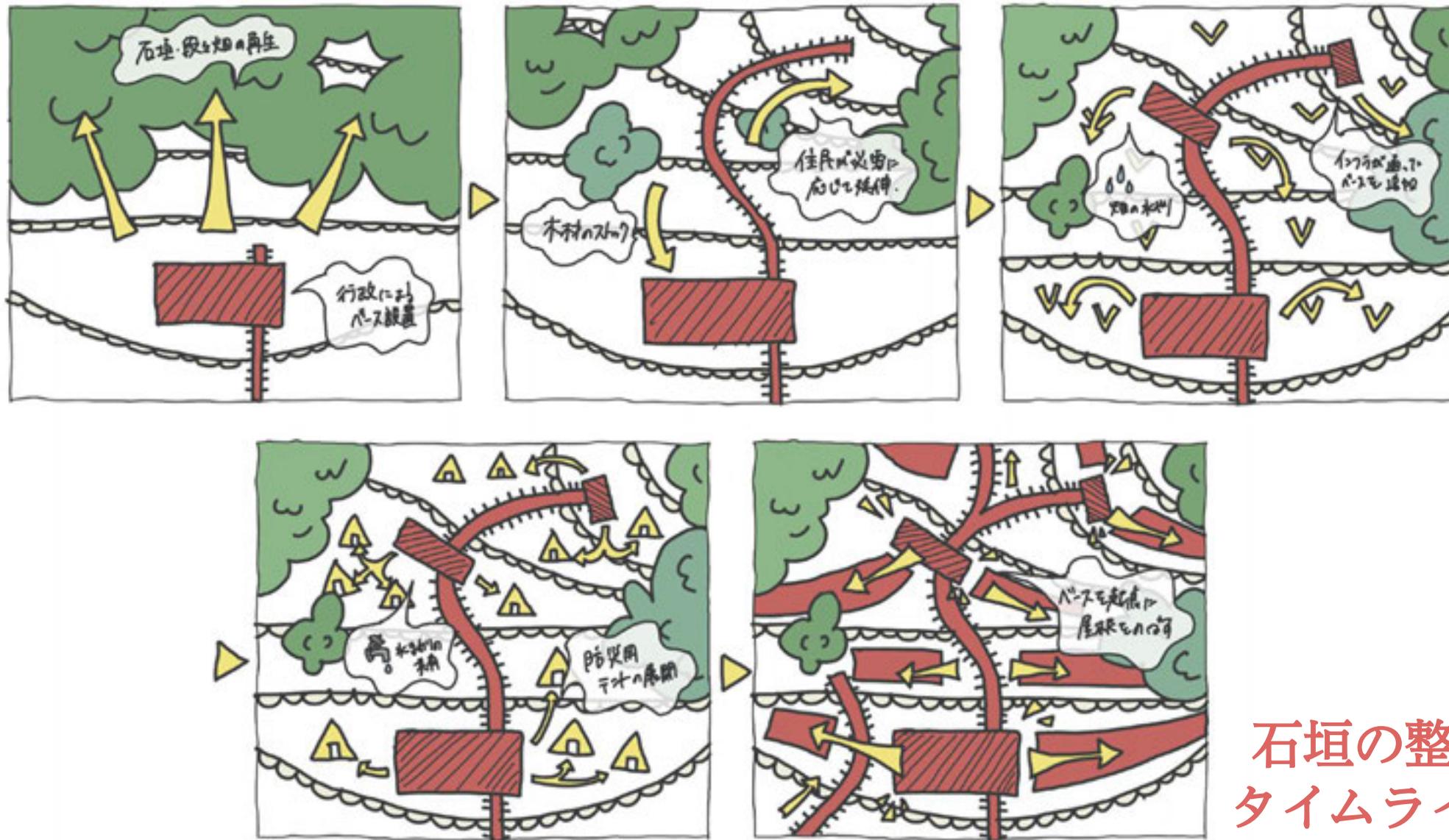
Q&A

予備スライド

行政と住民が連携して行う復興

大規模な土木工事による従来の行政主導型の復興ではなく、住民によるボトムアップの空間づくりと行政の実行力を組み合わせた復興を行う。



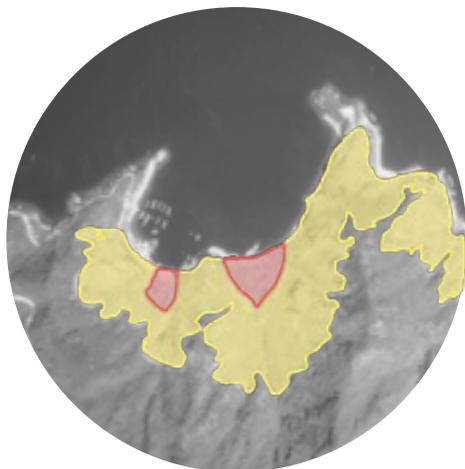


石垣の整備
タイムライン

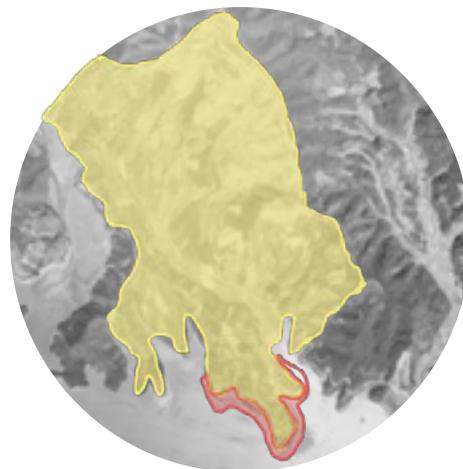
集落と段々畑の範囲

(1966年航空写真を加工)

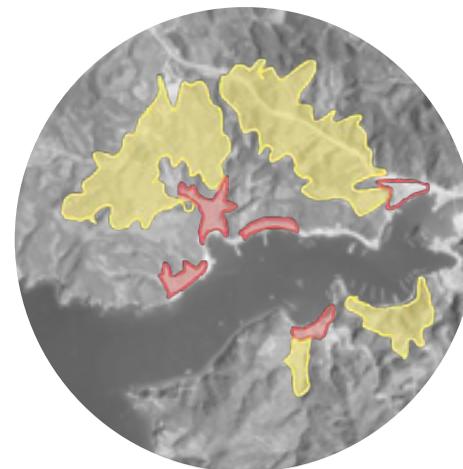
石垣の里として有名な外泊だけでなく、**どの集落でも居住地の何倍もの面積の段々畑が広がっていた**ことが航空写真から確認できる。



中泊・外泊



平山



深浦

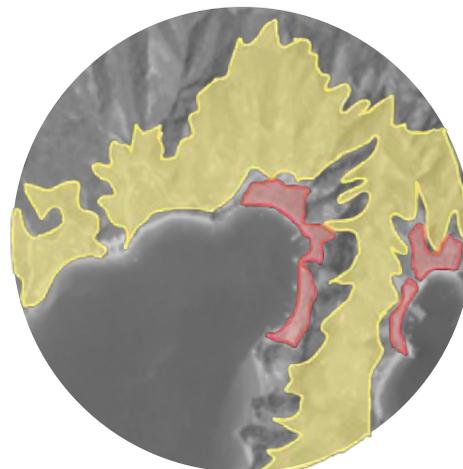
近世の時代から少しずつ開墾が進み、食糧不足が顕著となった戦後までに段々畑での営農はピークを迎えたとされる。

1960~70年代は穀物に代わって柑橘類やリンゴ、パッションフルーツなど当時新たに日本に持ち込まれた果物などの商品作物の栽培が試みられたが、あまり定着しなかった。

その後急速に段々畑は放棄され、今では集落に近い部分のわずかな面積で自家栽培的に営農が行われていることが多い。



船越



家串

各地で見つけた石垣

石垣は

①崩れても自分たちで積み直せる

②材料が現地で調達できる

という特徴をもつ、**ヒューマンスケールの土木構造**。

崩れたものを積み直すのは、技術と知識、体力が必要。担い手不足のことを考えれば、なおさら容易ではない。

コンクリートの擁壁のように安全性が担保されるわけではない。

それでも、山の頂上まで築き上げられたこのヒューマンスケールの土木ストックをこのまま放置するのではなく、一度目を向けてみる価値はあるはず。



空間構造

浜・里・山の三段構成

漁村集落は概ね標高の低いところから海・住・山の3つの異なる空間から構成される。

「浜」

港や作業場、市場など漁業のための空間

「里」

斜面に所狭しと住宅が並ぶ住むための空間

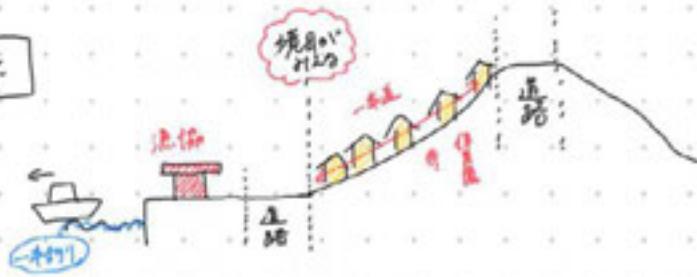
「山」

かつては頂上まで段々畑が耕されていた里山空間



各漁村ごとの違い

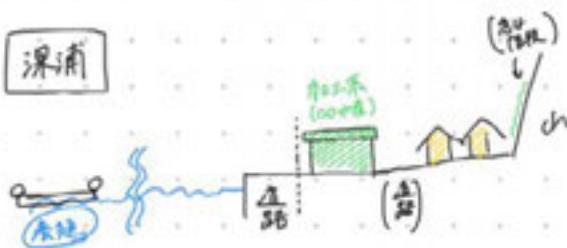
船越



外泊



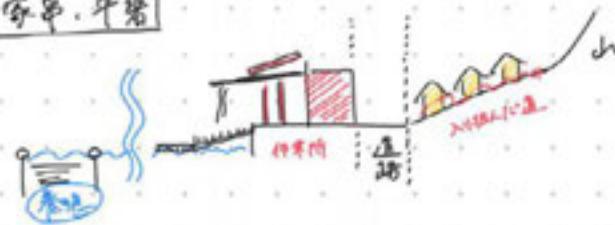
深浦



この路をいこう



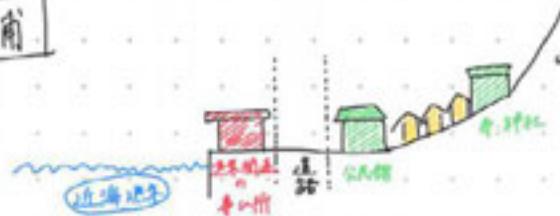
寄串・平岩



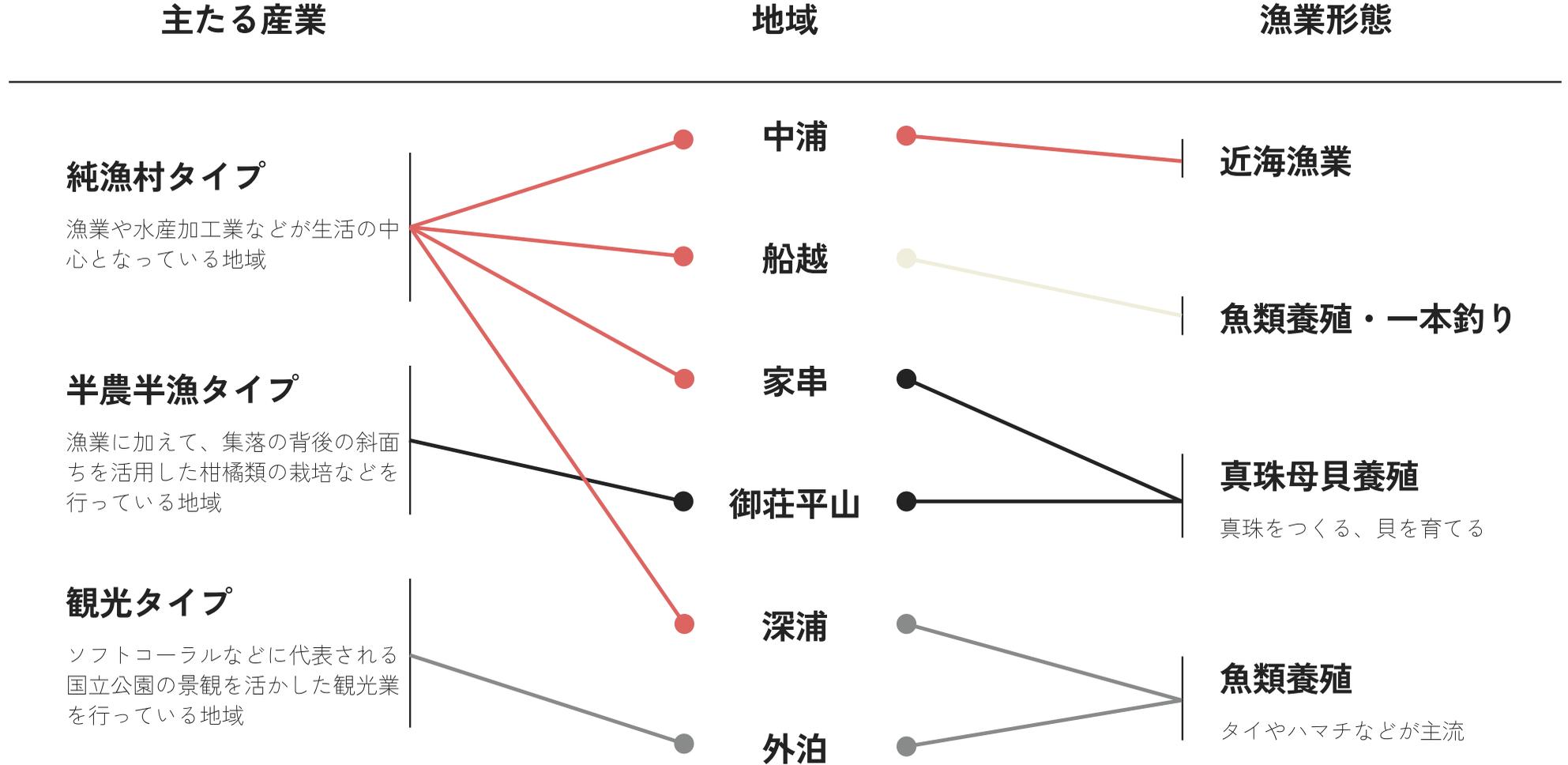
御荘平山



中浦



集落ごとの空間構成の差異



だんだん拓く、だんだん暮らす

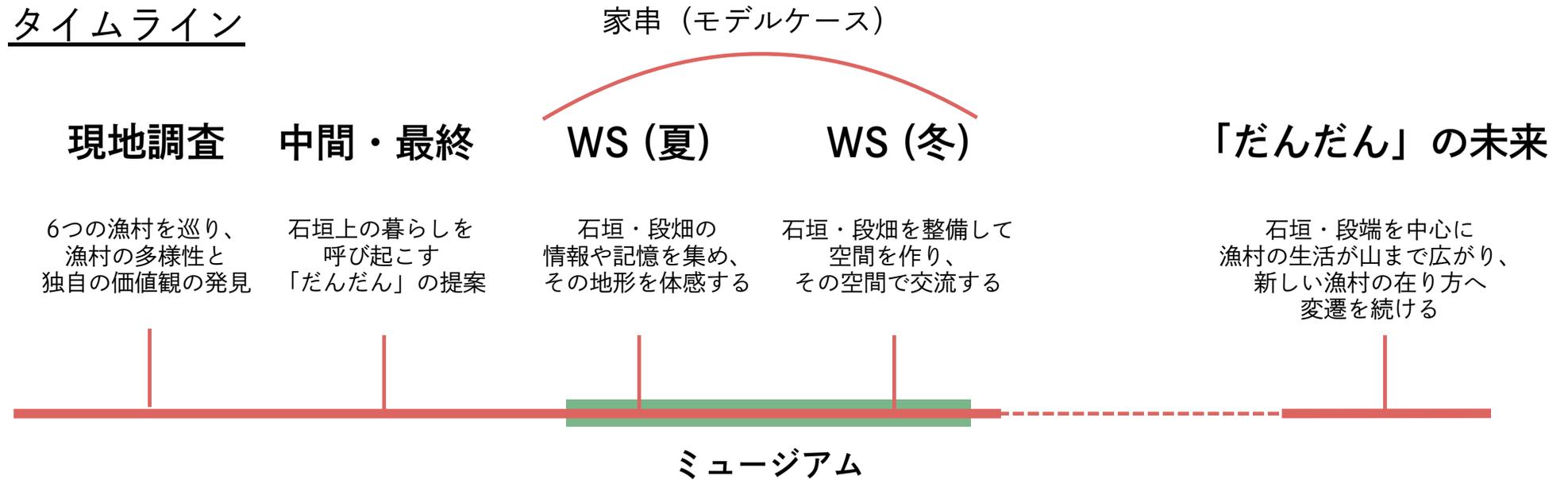
Action Plan

04 地域復興ミュージアム

「だんだん」が目指す愛南町漁村の将来の景色を地域に共有する。
石垣・段畑の歴史・記憶を辿り、
セルフビルドの機運を育む。



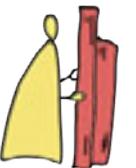
タイムライン



「だんだん」とミュージアムの関係性

「だんだん」を構成する2つの提案では、災害時に備え日常時から、石垣・段畑を活用して生活環境を拡充していくこと、自らの手でその環境を整備していくことが求められる

ミュージアムを通して、石垣・段畑への住民の関心を惹く。自らの手による整備と生活環境の拡張を体験し、提案実現の第一歩となることを目指す



漁村地域と石垣・段畑を繋げる **4** つのワークショップ

 **WS(夏)** 8月30日,31日

01 石垣・段畑 記憶集めWS

02 石垣・段畑 探検WS

 **WS(冬)** 12月

03 石垣・段畑 整備WS

04 石垣・段畑 交流WS

00 愛南町漁村の将来像（「だんだん」）を共有する(0.5h)

WS（夏）

提案内容をまとめたコンセプトブックを制作して配布
災害はいつ来るかわからない、できることから自分達で手を入れていく大切さを伝える

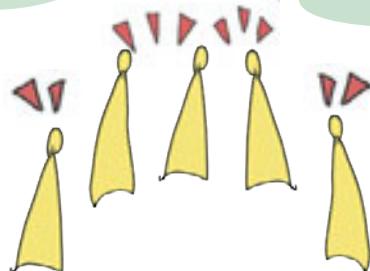
01 石垣・段畑 記憶集めWS(1.5h)

かつては生活の一部であった、石垣と段畑・・・

写真・地図・模型を囲み、昔の営みや里山の姿を語り合いながら、模型に情報を載せ、記憶を“見える化”する

「石垣・段畑で昔〇〇してたよね！」

「石垣・段畑を活用すれば△△ができそう！」



家串の住民 + 愛南町 + 東大チーム

02 石垣・段畑 探索WS(1.5h)

海沿いの公民館から里山の麓まで歩き、石垣・段畑を共に散策し、“今”の状態を確認する

WS（冬）の交流イベント、“将来”の活用方法を共に考え、アイデアを“見える化”する

- ①記憶とアイデアを載せた模型を公民館への展示し、地域資源化・WS（冬）までに書き足せるように解放
- ②集めた記憶・アイデアを加えてコンセプトブックver 2.0を作成

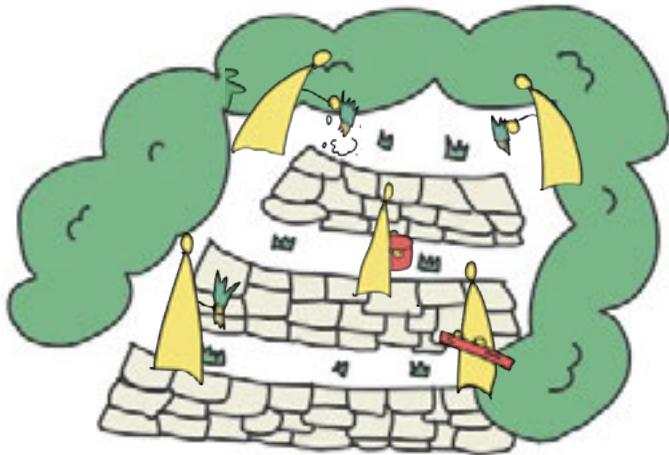
コンセプトブックver 2.0を配布

03 石垣・段畑 整備WS

外泊いしがき守ろう会協力のもと、

- 最初のエリア決め、石垣・段畑の草木を手入れする
- 崩れた石垣を組み立てる

「人々がつどう広場」を共に創る



家串の住民+愛南町+東大チーム+地域の高校生+ボランティア etc

WS (冬)

04 石垣・段畑 交流WS

WS (夏) のアイデアを元に、多様な人が石垣・段畑で交流するイベントを開催する
ex)ビアガーデン、流しそうめん

01~04のWSを元に、今後の石垣・段畑の活用方法について話し合う

- どの頻度でどう手入れをしていきたいか
- どう活用していきたいか

①WSで整備した場所と交流の写真を公民館に掲示し、蓄積していく
・ベースの導入後は、ベースに掲示していく

②集めた記憶・アイデアを加えてコンセプトブックver 3.0を作成

04 Action Plan

3つの主体とタイムライン

